

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 18 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp



感謝と祈りに加えられて

九州教区主教 ルカ 武藤 謙一

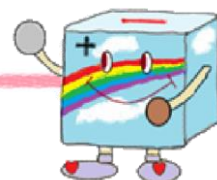
この原稿の依頼状と共にこれまでに発行された「ガリラヤのほとり」が同封されており、改めてそれらを読み返しました。どの号も素晴らしい内容のものばかりで、ささげるということ、感謝すること、ともに生きるということについて分かりやすく書かれています。また感謝箱献金のお献げ先に関しても「顔と顔の見える関係」を大切にしていることがよく分かり、丁寧な報告がなされていて、一つひとつの活動についてよく知ることができます。皆さんの熱い気持ちがよく伝わってくるニュースレターです。

それらの素晴らしい内容の「ガリラヤのほとり」を読んでいると、わたし自身の在り方が問われてくるようでした。我が家にも「感謝箱献金」として用いている献金箱があり、わたしもそこに献金します。でも本当に感謝の心をもって献げているかと問われれば、そうでもないこともしばしばです。喜びと惜しまず献げる豊かさを味わいながらしているかと問うならば、それもまたそうではないことが多いように思います。お献げ先の働きを覚えて祈りつつ献げているかと問うならば、それもまた胸を張って『はい』とは言えません。「共に生きる」喜びをもって献げているかと問われれば、これも・・・？

一所懸命熱心にこの働きに関わっておられる皆さんには本当に申し訳ない想いですが、司祭の時には教区婦人会のチャプレンも何回かさせていただき、感謝箱献金の活動の大切さと素晴らしさを知りつつも、日々の生活のなかでは上述のような情けない姿がわたしの実情です。

しかし、こんなわたしの献げる僅かな献金も、多くの皆さんの祈りと感謝のこもった尊い捧げ物と一緒に献げられることで、国内や世界各地の女性たちや子どもたちの生きる力を養う働きに用いられ、活かされているものとなるのだなと思わされています。そのこと自体が本当に有り難いことです。

旧約聖書の中に次のようなみ言葉があります。「女が自分の乳飲み子を忘れることがあろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも わたしがあなたを忘れることは決してない。見よ、わたしはあなたを わたしの手に刻みつける。」（イザヤ 49 章 15・16 節）日本聖公会婦人会のこの働きは小さな働きかもしれませんが、感謝箱献金を献げるわたしたちも、それを用いてくださる方々も共に、主によって生かされ愛されている者であることを実感したいものです。わたしもまた皆さんの後ろをついて歩みたいと想いを新たにしています。



リグリマ・ジャパン

よく見なければ見えない形

代表 上澤 伸子

いつもバングラデシュのガロの女性たちに、心を留めていただきありがとうございます。ご支援いただいている裁縫トレーニングも2014年3月で5年目合計6回になりました。わたしは、ある会合でひとりの方から「トレーニングの成果が、目に見える形で表れましたか」とたずねられました。おそらくその方の考える「目に見える形」とは、縫った服を村の市場で売るとか、仕上げた手工芸品を日本で売るといった、収入につながる製品だったかと思われます。

2009年、わたしたちは裁縫トレーニングを開始するまえに、裁縫を習う目的をメンバーにたずねました。第一の目的は、自分の家族や近所の人の服を縫うことでした。彼女たちによれば、「市場で服を買うお金が節約できれば、家計が助かるでしょ？」その言葉どおり、現在トレーニングを受けたメンバーたちは家族の服を縫い、衣服費を節約しています。なかにはグループの他のメンバーに縫い方を教える人や、縫ったブラウスやハンカチを教会で売る人も現れています。この「よく見なければ見えない形」が、彼女たちにとっての成果だったのです。

もう一つ、活動の成果が「よく見なければ見えない形」で表れている例をご紹介します。現地のリグリマは今年7月18-19日に「気づきのワークショップ・プログラム」というセミナーを開催し、30人のメンバーが参加しました。



ディスカッションの様子



キリスト教徒であるガロの人たちは、集会ではかならず聖書の講読やお祈りをし、メッセージを伝えます。現地のリグリマ代表ラブリー・ダゼルさんは、マタイによる福音書25:14-30を引用して、神さまがわたしたちにそれぞれ異なる賜物をくださったこと、だからその賜物を誠実に発揮しなければならないこととお話ししたそうです。次に、リグリマ中央委員会の委員から、女性グループの重要性や小規模融資の優先順位についての話があり、最後に、参加者全員によるディスカッションがおこなわれたそうです。セミナー終了後、ラブリーさんから、セミナーの報告書とともに次のようなお便りが届きました。



セミナーのあと、グループ・メンバーたちはとても積極的に活動しています。たとえば、こんなことがありました。

ボロランプール・グループには癌を患っているメンバーがいます。セミナーに参加した何人かが、彼女の治療のために寄付金を集めました。これもセミナーの成果のひとつと言えるでしょう。わたしはこう思います。わたしたちはまず団結し、連帯しなければなりません。そうすることで仲間にか力を与えることができます。ありとあらゆる面で力づけることができるのです。そのことをわたしはセミナーでみなさんにきちんとお伝えできたのだと思います。

わたしがセミナーで日本のリグリマ委員会からの手紙を読みあげると、参加者たちはたいへん喜んでいました。セミナー最後のふり返りの時間に、各グループは、日本からのさまざまな手助けに対して、感謝の気持ちを言葉にしていました。そして、リグリマと他の NGO グループとの違いを述べ合い、次のような相違点を見いだしました。

それは、①草の根レベルから始まったこと、②互いの問題を知って共に解決しようとしていること、③毎月の貯蓄をつうじて相互扶助をおこなっていること、④裁縫トレーニングが家計の助けになっていること、⑤中央委員会が小規模融資をおこなっていること、⑥セミナーで仲間意識を培い、多くのことを分かち合えること、⑦改良かまどがメンバーの女性にとってたいへん役立っていることです。

ラブリー・ダゼルさんのお手紙より

このお便りは、個人の意識やグループ内のつながり、海を越えた交流といった「よく見なければ見えない形」で大切な成果があったことをしっかりと伝えてくれています。

現地のリグリマは今年で創立 10 周年を迎え、メンバー全員に呼びかけて今秋、記念集会を開催することを計画しています。みんなが楽しみにしている裁縫トレーニングは来年 3 月に予定されています。そしてガロの織物で作られたティッシュボックス・カバーとブックカバーが、リグリマ製品として日本に運ばれてくるのもすぐまぢかです。これからも手を携え、よりよい明日をめざしたいと思います。

わたし自身、このような女性たちと共に働けることを感謝しています。みなさま、どうかわたしたちがさらに前進してゆけるようお祈りください。

できることから始めよう！

感謝箱献金をお献げしている団体の多くは、手作りの品をサポート商品として販売し、その収益を活動費として用いています。それらの商品を婦人会や教会有志グループでの集まり、教会バザーなどで販売していただくことも大きな支援につながります。また、感謝箱献金をお献げしている支援団体の方のお話を聞く機会を持ちたいとお考えでしたら、ぜひ、感謝箱献金事務局までお問い合わせください。

現地での活動の様子をご報告いただきながら、分かち合うことで、お献げ先の皆さんともう一歩近づいて交流を深めることの出来る素晴らしい機会となると思います。

いっしょに歩こうPJ リフレッシュ・プログラム

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト 事務局長 池住 圭

原発事故から3年半余

原発事故から3年半余が経過しました。しかしながら、原発事故による影響は深刻さを増すばかりです。郡山市内のあちこちで目にする「現在除染作業をしています」の看板と共に目にする防護服の作業員、市役所や学校、公園などの公共施設に設置された放射能モニタリング・ポスト、新聞に毎日掲載される「環境放射線測定値」「食べ物などの放射性物質検査結果」などなど、原発事故以前には決してなかった光景です。これらを毎日目にしなければならない住民の不安やストレスは計り知れません。

また、だんだん原発事故やその被災者に関するニュースが少なくなる一方で、生活が改善されて来ているとの実感が持てないまま孤立し、取り残されているように感じています。

このような中、この度の日本聖公会婦人会 会長会決議は、リフレッシュ・プログラムための支援であるばかりでなく、今もなお放射能汚染におびえながら不安な日々を送っている者たちへの大きな励ましになります。



～先の見えない闘い＝除染作業～

日本聖公会総会決議

日本聖公会は、2012 年の総会で「原発のない世界を求めて－原子力発電に対する日本聖公会の立場－」を決議しました。その決議の中に「私たちは教派・宗教を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、愛し合い、支え合って生きる世界を目ざします」とあります。

この決議に基づいて「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」が 2013 年6月に設置されました。以来、福島県郡山市にある郡山聖ペテロ聖パウロ教会内に事務所を設け、被災者の支援活動をしております。

夏の思い出 写真館♪

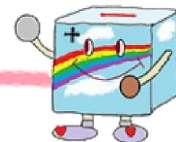
展望台から見える景色は最高!!



おもいきり水遊び→

川の水、冷たかった～↓





外遊びができない子どもたちのために

この度、感謝箱献金よりお献げ頂いた献金は、原発問題プロジェクトが大切にしている支援活動の1つ、「リフレッシュ・プログラム」のために用いさせていただきました。原発事故から3年半余が経った今でも、多くの子ども達が放射能汚染のために外遊びができないでいます。子どもたちは、太陽や風によって季節の移ろいを十分感じる事ができないばかりでなく、土や草花、樹木、落ち葉や木の実、昆虫などに直接触れることもできません。

リフレッシュ・プログラムは、このような子どもたちに、汚染されていない自然の中で、のびのびと遊んで貰おうと実施している園外活動です。主な対象は、郡山セントポール幼稚園と小名浜聖テモテ幼稚園の園児で、年間を通してセントポール幼稚園は10回、聖テモテ幼稚園は4回実施しています。この園外活動は、こども達の日頃のストレスをなくすばかりでなく、体内に取り込まれた被曝量の減少にも効果があります。

夏休み期間中には、対象を園児の家族や卒園児にも広げ、家族旅行やキャンプなどを支援しています。今年は、長崎県高島や軽井沢での親子キャンプ、岐阜県郡上八幡での子どもキャンプ、横浜教区清里大家族キャンプなどの参加支援に用いさせていただきました。写真を通して、自然に抱かれ、本来の姿を取り戻した子どもたちをご覧ください。

今後とも、どうぞお祈りの内にお憶え頂き、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

九州教区や沖縄教区の人たちと・・・!



お魚(°))<<
釣れたね!



✿ セントポール幼稚園園児

- ・猪苗代町・じゃぶじゃぶ池(8月29日)
- ・スペースパーク(9月2日)

✿ セントポール幼稚園&

小名浜聖テモテ幼稚園卒園生
(小中学生計23名参加)

- ・岐阜県郡上市八幡町小那比(8月16日～22日)

✿ 在園児・卒園生とその家族(11家族44名参加)

- ・長崎県高島(7月～8月)



滞在期間中、家族やお友達と思い思いに過ごす。

国際子ども学校 (ELCC)



名古屋学生青年センター 近澤 淑子

いつも皆さまから国際子ども学校のためにお祈りとご支援をいただき、ありがとうございます。
子ども学校は、現在 17 名。幼稚園年少児から小学生、15 歳の子も通ってきています。この中には、日本国籍を持ちフィリピンで育った子どもたちや両親ともにフィリピン人という子どもたちがたくさんいます。また最近では、お母さんはフィリピン人、お父さんがブラジル人という子もいます。家庭では日本語を話す機会が殆どないので、やがて地域の学校へ行く子どもたちのために、特に日本語に力を入れています。子どもたちがスムーズに学校に馴染めるよう、先生たちはいろいろ工夫して年齢に応じた授業を行っています。

1 学期には授業の他に、遠足やプール遊び、バーベキューパーティなどの行事がありました。

また先日は、スポーツフェスティバルがあり、可児の教室の子どもたちも参加。広い体育館をお借りして皆思いっきり走り回り、楽しい交流の場となりました。どんな時でも、子どもたちは天真爛漫、いつも明るく、にぎやかです。

これからもこの子どもたちの笑顔が続くようにと願っています。



スポーツフェスティバル



夏のユニフォーム



授業の様子

できることから始めよう！

■ 本をおゆずりください

子ども向けの絵本、文庫本、趣味の本から、学術書、キリスト教書まで、ご家庭で不要の本をおゆずりください。（＊百科事典や教科書・参考書類の持ち込みはご遠慮ください）おゆずりいただいた本は、

絵本などについては国際子ども学校等で用いる他、その本を必要としている方に販売して役立てます。また売上は、当センターの諸活動のために用いさせていただきます。CD・DVD も合わせて募集しています。＊書籍は当センターまで直接お持込みいただくか、宅急便などでお送り下さい。事前連絡は不要です。

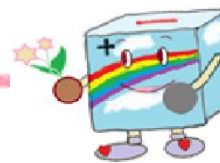


〒488-0801

愛知県尾張旭市東大道町原田 6 8 愛知聖ルカ教会／聖ルカセンター 宛



可児ミッション



可児ミッション 職員 赤坂 唯

通学バスを購入しました

この度は皆様から頂きました貴重な献金でバスを購入することができ、誠に感謝しております。バスは大変活躍しております。

現在可児ミッションでは岐阜県に3つの教室を設け、3～18歳まで約60名の子どもたちが通室していますが、今回購入のバスは「可児教室」の子ども達が通室するのに使っています。以前よりも入室希望者が増え、親が朝早くに仕事に出かける児童も多いため、教室の送迎車を必要としていました。8人乗りの乗用車では、全員を一度に乘せることができない状態にあったため、バスを購入することになりました。大人数を安全に乘せられるようになったことで、以前よりも多くの子どもが、早く教室に来ることができ、その分たくさん遊べるので、子どもたちは大喜びです。

可児教室では、日本語、算数、図工等の授業を取り入れています。ひらがなや数の読み書きなどを練習したり、ハサミやのりを上手に使って工作をしたりと、来年度小学校へ入学する準備を少しずつ始めています。日本語での会話も上達し、子どもたちは毎日元気に通ってきています。

この先もどうぞ暖かく見守り、お祈りいただければと思います。



13人乗りのバスで安全に登下校できるようになりました

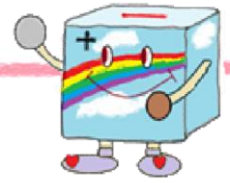


授業の様子（写真左上の女性：赤坂 唯さん）





ニームの会



有機野菜とマッシュルームづくりのプロジェクト -南インドの農村のダリット女性たち-

代表 山下 明子

いつもご支援に感謝します。頂いた献金を用いて、南インドの WOLD では、農村女性訓練センターの土地を利用して、有機野菜づくりとマッシュルーム栽培の準備を始めています。

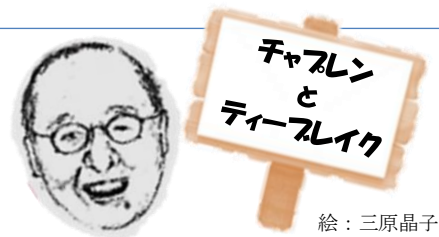
現地からの報告によれば、WOLD がつくった自助グループから 30 人のリーダーを選んで、まず有機農業について、土壌の検査と耕し方、自然堆肥のつくり方と入れ方などの基本的な講習会を行いました。次に、専門家を招いて、センターのあるヴァダヴェッテイの土地での有機農業を支援してもらうように相談しました。その結果、水がもっと必要ということになり、4 万ルピー（約 73000 円）をかけて井戸を掘りました。

準備がほぼできたので、野菜栽培を始めるところです。インドでは野菜が高騰しており、安い配給品（米、小麦粉、油、砂糖など）にたよる貧しいダリットは田舎でも野菜をほとんど口にできません。野菜をつくれれば、すぐにローカルマーケットで販売できます。なお、マッシュルームについては、この地域の土地では※オイスター・マッシュルームという種類しか栽培できないそうなので、さらに投資と準備が必要です。すでにこの事業を行っている他地域の女性グループを訪問して、栽培と保存方法、販路などについて学習する計画です。

※オイスター・マッシュルーム

ヒラタケ、日本では一般的に「しめじ」として売られている。

幸い



絵：三原晶子

ルカ伝には「今飢えている人々は幸いである。あなたがたは満たされる」「今満腹している人々、あなたがたは不幸である。あなたがたは飢えるようになる」とあります。おいしいものをお腹一杯食べて、ついつい食べ過ぎた、ということがよくあります。今満腹している人、それは私です。「長生きしたければ朝食を抜きなさい」という本があります。「体のさまざまな不調や、恐ろしい病気は、実は『食べ過ぎ』が原因」と言っています。なるほどと思います。だからと言って、今飢えている人が幸い、とはとても思えません。マタイ伝では、「心の貧しい人々は幸いである」とあります。貧しさを生活の具体的な貧しさから、体と心の人間全体としての貧しさ、霊的な意味へと導いてくれます。でもイエス様は、本当に貧しくて、飢えていて、泣いている人々を前にして、あえて幸いとおっしゃったのです。何故でしょうか。この謎は、本当に何もなくなる時、なるほどと、わかるのでしょうか。

チャプレン・司祭 ヤコブ 三原一男

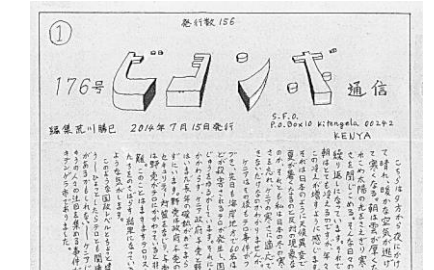


こぼと通信

在ケニア NGO「サイディア・フラハ」からニュースレター「V y o m b o (※ビヨンボ)」が届きました。

B4の用紙の両面に、手書きで文章と挿絵が記された紙面からは、ケニアで子どもたちと真摯に向き合う荒川勝巳氏(サイディア・フラハ代表)の日常の様子が切々と、しかし気負うことなく、不思議なまでに朗らかに綴られています。貧困や、権力抗争による暴力事件など、身近なところに起きている問題に危惧しながらも、その土地に生きるものの視点に立った判断で状況に応じて対処し、身を守り、困難を回避する様子や、社会へでていったサイディア・フラハの卒業生の行く末を案じ見守り続け、その後を伝える記事からは、総じて明るさが感じられ、ユニークで前向きな日々の歩みに感心しながら一気に読み終えてしまいました。サイディア・フラハの公式ホームページにも「メール版ビヨンボ」として掲載されていますので、是非ご覧ください。今回の記事のなかに、サイディアの施設に暮らす女の子の作文がありましたのでご紹介します。

※ビヨンボ 「道具」を意味するスワヒリ語



サイディア・フラハの生活

ここでの生活はとても快適です。私がやって来た時から、スタッフの人たちは私を施設の子どもの様に愛してくれました。私が何かしようとしたら、他の子どももスタッフも教えてくれます。私がここへ来てから学校の学習が日々改善しているのは、晩に予習・復習の時間がとれるためです。ここで私たちは姉妹として暮らしています。私たちにはそれぞれ、畑作りや料理作りなど、別の家事手伝いの役割があります。もし私たちが手伝いをうまくできなかった場合はスタッフの人たちがアドバイスし、必要なものがあれば与えてくれます。私はここへきてたくさんさんのことを学びました。マキ割りのしかた。畑の草のおしり方。雑草の刈り方。私はそのため、このごろは王と王妃のようにとても幸せです。それで悲しいこと、心配することは全くなくなりました。自然環境も良くて、愛すべきところです。

私は学年末にある小学校卒業試験の合格をめざし、平穩に授業学習や宿題に励みます。

イザベラ

◎今年3月に施設へ入園したイザベラ(小学校8年・十四歳)の作文。

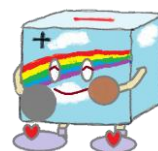
楽しみながら国際協力を体験

2014年10月4日、5日、週末の二日間に東京、日比谷公園で「グローバルフェスタ ジャパン 2014」が開催されました。「日本最大級の国際協力イベント」というその副題の通り、外務省などの政府関係、大使館、NGO等、様々な団体のブースが所狭しと軒を連ね、各々関係している国の商品や食べ物を販売したりしながら、活動紹介等を行い、国際協力についての意識を高めてもらおう、というのがこのフェスタの目的で、毎年同じ頃に、同じ日比谷公園で開催されています。目的を読むとかた苦しい印象があるかもしれませんが、「お祭り」ですから、食べたり飲んだり、様々な国のオリジナリティーあふれる商品を眺めたり、ステージではコンサートやトークショーなどもあって飽きませんでした。

前置きが長くなりましたが、その数ある団体の中に、感謝箱献金のお献げ先のひとつ「サイディア・フラハ」を日本側でサポートしている「サイディア・フラハを支える会」も出展されており、会の代表者である大門千春氏と短い時間でしたがお話しすることができました。サイディア・フラハで作られている商品(コースターやコットンのスカーフ、アクセサリー等)を見せて頂きながら気さくにお話しくださり、そんなお人柄とサイディア・フラハで作られている品々の温かみとが重なる部分を感じられました。また、皆様がお献げくださった感謝箱献金がしっかりと各団体に配分されるよう、日本聖公会婦人会の中でよく話し合われていることを会報などを通じて知り、感心しておられました。

今後も感謝箱献金の働きに共感をもって歩んで下さる方が少しでも増えるように、また更に豊かな働きへと進めていけますように、心を新たにす出会いになりました。

感謝箱献金事務局
スタッフ 相宮 陽子



感謝箱とわたし

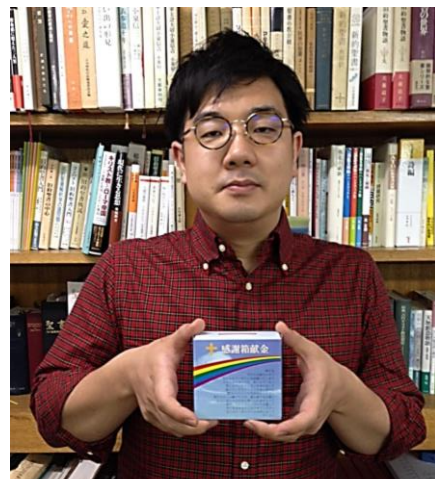
聖職候補生 ヨセフ 太田 信三

聖公会神学院在学中、「被献日献金」より沢山の貴重な書籍の援助をいただきました。日聖婦の大切なお働きに心から感謝申し上げます。神学院卒業後の日聖婦とわたしの接点は、現場に出ますます活躍する被献日献金でいただいた書籍と、部屋に置かれた「感謝箱」です。

感謝箱に描かれている虹色は、わたしたちの多様な生のあり方、神様から与えられたそれぞれの賜物の多様さを象徴しているように感じられます。虹が絶妙なバランスで互いの色を引き立て合い、それぞれの色の輝きを引き出しているように、わたしたちそれぞれに与えられた賜物は、それぞれが互いに引き立て合い、生かし合うことで輝きます。

キリスト教の本当にはじめの頃、イエス・キリストを信じる人々は、一つの家に集い、共に礼拝をし、共に生活をしたといいます。それぞれの持っているお金をいったんテーブルの上にすべて出し、そこから必要な人に行き渡るように分配しました。お金に限らず、すべての人が、神様からいただいた賜物を用い合い、分かち合うことで人々は生活をしていたのです。イエス・キリストが身を持って示してくださったように、「分かち合う」ことで神様から与えられたわたしたちの命は輝き、生かされるのだと、イエス・キリストの名の下に集っていた人々は信じていたのだと思います。それどころか、そうしなければわたしたちは生きることができない、という程にその大切さを確信していたのだと思います。

感謝箱の働きは、わたしたち一人ひとりが与えられた賜物を生かし合い、すべての命を輝かせる、「分かち合い」というキリスト者の生き方を象徴的に実践しているのだなあ、と感謝箱を見ながら感じています。感謝箱の存在を通して、とても大切な原点を示されているように感じています。



プロフィール

名前：太田 信三（おおた しんぞう）

生年月日：1980年7月14日生まれ。

趣味：サッカー観戦、音楽鑑賞。

2014年聖公会神学院卒業後、東京教区聖アンデレ教会に勤務。

感謝箱献金は

どなたでも参加することができます

- ❖ お友達やご家族に、感謝箱献金の働きを是非ご紹介下さい。
- ❖ 感謝箱献金便り「ガリラヤのほitori」を集いの場で読んでいただき、困難のうちにある方々をお祈りにお覚え下さい。
- ❖ 所属教会での感謝箱の設置と管理にご協力下さい。

ご希望の方には機関誌や献金箱を郵送いたしますので、**感謝箱献金事務局までご連絡**ください。↓↓↓

☎ 045-620-8282

e-mail : kansyabako@grace.ocn.ne.jp



編集後記❖ 「ガリラヤのほitori」18号には、お献げ先のグループの方たちから、活動の報告と共に、感謝箱献金へのお礼が届けられ、掲載・発行することが出来ました。些少であってもお祈りをもってお献げした献金が少しでも活動のお役に立っていることはとても嬉しく、私たちにとっても励みになり、大きな力となります。お献げ下さいました全国の信徒の方には感謝申し上げます。お読みいただいて、献金がどのように用いられているかを知っていただき、これからもどうぞ感謝箱献金の活動をお支え下さい。 (古谷美子 記)